

平成 29 年 7 月 28 日
於・日本学術会議講堂

第 174 回臨時總會速記録
平成 29 年 7 月 28 日

日本学術会議

目 次

1、開会 午後 1 時 0 0 分	2
1、定足数確認等	2
1、会長活動報告	5
1、提案事項・採決	
①第24-25期会員候補者の承認	12
1、事務連絡等	19
1、散会 午後 2 時 3 0 分	19

[開会（午後1時）]

○大西会長 これより日本学術会議第174回臨時総会を開会いたします。

[定足数確認等]

○大西会長 議事を進めてまいります。

本日の出席会員は、5分前現在で119名であります。その後も見えていますので、今、もう少し増えていると思いますが、200名が現員ですので、119名、5分前現在で定足数を超えているということでもあります。したがって、総会は成立しています。

まず、前回の総会以降、4月でしたけれども、事務局幹部の人事異動がありましたので、企画課長から紹介してもらいます。お願いします。

○企画課長 事務局でございます。

お手元の資料の資料1の6ページを御覧いただければと存じます。

前回の総会以降、7月11日付けで事務局長の駒形健一が政策統括官の共生社会政策担当付国際調整官に異動、転出いたしましたして、同日付けで後任といたしまして、私の隣に今おりますけれども、山本茂樹が着任いたしました。異動前は北方対策本部の審議官をしておりました。

それから、同じく同日付けで、審議担当第二参事官の石井康彦が文部科学省大臣官房付の後、国立研究開発法人科学技術振興機構参事役研究開発戦略立案担当に異動いたしましたして、その後任といたしまして、今、左隣におりますけれども、糸川泰一が着任いたしました。異動前は環境省原子力規制委員会原子力規制庁長官官房放射線防護企画課保障措置室長をしておりました。

では、まず、新局長より一言御挨拶させていただきたいと存じます。

○事務局長 ただいま御紹介にあずかりました、新しく事務局長になりました山本でございます。私は、昭和59年に役所に入りまして以来、総理府、総務庁などのいろいろな分野に来たものでございます。学術会議の皆様方の活動が円滑に進められますよう努めてまいりますので、よろしく願いいたします。（拍手）

○企画課長 それでは、引き続きまして、新しい審議担当第二参事官より、一言御挨拶をさせていただきたいと存じます。

○審議担当第二参事官 このたび、審議第二担当を拝命いたしました糸川でございます。前職は原子力規制庁でございますけれども、もともと科学技術庁、文部科学省の出身で

ございます。どうぞよろしく願いいたします。（拍手）

○大西会長 ありがとうございます。どうぞよろしく願いいたします。

学術会議の事務局には、局長、次長、それから課長級5人の課長以上の幹部が7人いますけれども、この4月以降、そのうち5人が変わることとなりますが、今日までに辞令が正式に出ている方ということで、今お二人を紹介させていただきました。既にもう交代している方もいますが、この後、あとお二人ほど、また交代される予定でありますけれども、まだ発令前ということなので、お二人の紹介に現在はとどめたいと思います。

旧の方は、今日お見えではありませんけれども、長きにわたって学術会議のために尽力くださったわけで、改めて感謝申し上げます。新しいお二人、局長と桑川参事官、御挨拶いただきましたが、どうぞよろしく願い申し上げます。

それでは、本日の配布資料について、事務局から説明してもらいます。企画課長、お願いします。

○企画課長 事務局でございます。

本日の配布資料でございますけれども、資料のまず一番上には配布資料一覧がございますので、これを御参照いただければと思います。

その内訳でございますけれども、まず、資料1といたしまして、今回の第174回総会資料というものがございます。

そしてその後ろに、資料2といたしまして、提案1ということで、会員候補者の承認。それからこの提案1の別紙ということで、具体的なお名前などが記されました会員候補者名簿案というものがございます。そしてその後ろに参考配布ということで、本日、総会中の部会、委員会などの会場などを記した資料もつけております。

以上、そろっておりますでしょうか。もしそろっていなければ、近くの事務担当にお声がけいただければ、しかるべき対応をいたします。

それから資料2は、人事に関する資料で、個人情報資料でありますので、慎重を期しまして、ナンバリングを施してございます。そして本日の総会散会后に、これを回収をさせていただきますので、よろしく願いいたします。会場の外には、是非ともお持ち出しにはならないようお願いいたします。

なお、この資料2、候補者関係の資料につきましては、非公開審議が今後予定されておりますので、本日、傍聴者の方々にはお配りはしておりません。

それから、資料2と参考配布以外の資料一式につきましては、事前にネット上の掲示板にも掲載しておりますので、併せて御活用いただければと思います。なお、本日不要であるという資料におきましては、残しておいていただければ当方で処分いたしますので、そのようにしていただければと思います。

以上でございます。

○大西会長 ありがとうございます。資料についてよろしいでしょうか。

それでは、総会日程について、説明いたします。

お手元の資料1の表紙をめくっていただいたところに、第174回総会日程があります。ページで言うと3ページ目になります。

まず、私から、4月に開催された、前第173回総会以降の学術会議の活動全般について、報告いたします。続いて、今日のメインであります、提案1の、会員候補者の承認の提案理由説明・採決を行います。なお、提案理由の説明後、名簿確認の時間、採決までの間、名簿確認のために30分程度時間を設けますので、その間に名簿を御確認いただくようになっています。よろしく願いいたします。

提案・採決の後、総会は終了します。14時30分から幹事会を開催する予定です。その他の各種委員会の会場については、電光掲示板でお知らせすると同時に、会議室の一覧を本日の参考資料として配布していますので、御参照ください。

以上が議事の予定であります、何かこれについて御質問、御意見がありましたらお願いいたします。よろしいでしょうか。

それでは、今申し上げた議事進行に従って、進めてまいります。

今、申し上げませんでしたけれども、まず資料1の5ページを御覧いただきます。資料1の5ページで、前回総会以降に新規で任命された会員を御紹介させていただきます。5月15日付けで、井伊雅子先生が新しく会員として任命されました。所属部は第一部であります。よろしく願いいたします。

井伊先生、御挨拶、一言いただけたらと思います。

○井伊雅子会員 一橋大学の井伊雅子と申します。よろしく願いいたします。

日本学術会議の会員に就任いたしましたことを、大変光栄に思っております。専門は、社会保障の中で医療経済や政策、アジアの社会保障問題などにも取り組んでおります。経済学の知見を生かしつつ、日本が抱えている問題に取り組んでまいりたいと思います。

どうぞよろしく願いいたします。（拍手）

○大西会長 どうぞよろしく願いいたします。

ここで、新規に会員になっても任期が9月までではないかと、思われるかもしれませんが、井伊先生は、前任の方が都合で割と早く会員をやめざるを得なくなりましたので、次の期まで、24期末までが補欠の会員ということになりますので、この9月の改選には該当されません。どうぞよろしく願い申し上げます。

次に、資料1の5ページであります、日本学術会議関係者の叙勲・褒章の御受章について紹介しています。受章された皆さんについて、心よりお祝いを申し上げます。

[会長活動報告]

○大西会長 それでは、活動報告ということで、私から活動報告をさせていただきます。

それでは、お手元にも資料があるかと思いますが、第23期の最後の総会、本日は臨時総会ではありますが、最後の総会でもありますので、第23期全体の総括、それから2017年4月から今日、7月までの活動報告ということになります。

ただ、御承知のように、今ちょうど提言・報告が審議の佳境を迎えています。幹事会で最終的にそれを承認するというところで完了するわけではありますが、6月の幹事会から7月の幹事会にかけて、本日も含めて、この3回の幹事会で20件を超える、30件近く、12、9、9ですからちょうど30件の提言・報告を審議しています。これらはやがて公開されることになるわけではありますが、事前情報では、まだ70件残っているということで、この6月以降100件、100件全部はゴールに到達しないのではないかという気もするのですが、もし到達すると100件、あと70件あるということで、つまり今期出す提言・報告の過半が、これから世に出るということになります。

したがって、この時期、期としては終わりに差しかかっているのですが、学術会議の成果をそうしたアウトプット、提言とか報告等として見ると、まだ道半ば、場合によってはそこまでまだ行っていないという段階であります。そういうことを含みおきの上、お聞きいただきたいと。

それで、この総会のたびに、期を通じて実現するべきこと、これは最初に掲げたテーマであります。責任ある助言者としての日本学術会議、学術活動の発展方向、新たな必要領域を積極的に示す、そういう役割を持った学術会議、さらに、信頼される国際的なパートナーとしての日本学術会議という、三つのテーマを今期について掲げました。

それで、それがどういうふうに展開されてきているかということではありますが、まず、責任ある助言者としての日本学術会議ということで、これは政府、社会に対して提言・報告等を通じて助言を行う機関ということでもあります。学術会議の役割は、個別の専門領域について最新の知見を提示するというところよりも、そうした個別の学術分野が社会とどういった関係があるのか、あるいは社会の需要ということを踏まえて、そうした研究が進められているのかということに一つの関心があるということで、ここで言う社会のための学術という視点、あるいはE L S Iという観点、こういう観点から、諸学術分野を見るという役割があると思います。

今期については、特に一つの領域として、科学技術基本計画に関する提言、あるいは国立大学のあり方、研究資金という、学術の実践にとって極めて重要な役割を持っているこうした領域における議論というのを、積極的に進めてきました。この三つ挙げたもののうち、国立大学のあり方と研究資金については、最近、国立大学のあり方はまとまりまして、研究資金については、まとまる直前の段階にあると、最終承認の直前の段階にあるというふうに認識しています。

こういった領域で、特に基盤研究について政府の支援が引き続き必要で、極めて重要であるということと同時に、新しい研究資金、競争的資金についても、民間との連携を含めて、更に拡大をしていくべきだというような視点を盛り込んだ、そうした提言・報告を出してきました。特に、若手の研究者が育ちにくい仕組みに結果としてなっているということ深く憂慮して、若手研究者が伸び伸び研究して発展できるような仕組みというのが必要だということ、強く訴えているということでもあります。

それから、これは22期から続いていますけれども、防災・減災、原子力発電等において積極的な見解を表明してきていると。特に今期では、原子力発電問題についても、締めくくり的な提言をまとめる必要があるということで、これも最終まとめの少し手前の段階に来ているということでもあります。

防災・減災については、外部に学会、あるいは協会の連合体として、防災学術連携体というのを組織してもらいました。これには積極的に学術会議も協力したわけではありますが、全部数えると150ぐらいの学協会が連携体を組織して、ここと学術会議の専門家グループというのが密接に連携をとって、この防災・減災についての活動を進めているということで、学術会議が今の仕組みになってから、学協会との関係が疎遠になっているという問題が指摘されていますが、それを埋めるというか、突破する新しい試みとして、学術会議内の組織と外の学協会連合組織との連携という、新しい形が生まれたのではないかというふうに思います。

二つ目が、学術活動の発展方向、新たな必要領域を示すということで、特に、これは今期も大型研究計画の提案を行って、科学技術研究の新しい方向を示すということを行いました。これが具体的に生かされる、ファンディングを得て生かされるには、まだ少し時間がかかったり、まだ様々な分野での活動が必要だと思いますが、学術会議として研究の方向について示すことができたのではないかと思います。

それから、やや地味な活動ではありますが、大学教育の質保証のための参照基準という統一的なテーマで、各分野における参照基準をつくってまいりました。これが積み重なってきて、30分野で公表することになります。ほぼ、学術会議の分野別委員会の数と同じでありますので、完全に同じでありますので、ちょっと一つの分野が二つに分かれているというのはありますので、正確に一対一対応はしていませんのでありますが、ほぼ全ての分野で、この参照基準を出すことができたのではないかと思います。これは全部そろえてみると、大学教育というのがどんな方向を示していくべきなのか、どういう水準であるべきなのかというのが、学術会議の見解として示されたということになるのではないかと思います。各方面、特に大学でカリキュラムをつくっていくときに、幾つかの大学では既に参照されているというふうに伺っていますので、有用なものになるのではないかと思います。

それから、科学者の行動規範、これは前期つくったものでありますが、今期更に学術と安全保障の問題について、相当深掘りした議論が数十年ぶりに行われました。こうした議論を通じて、学術と社会の関係でも種々の新たな見解を学術会議は表明して、まず、社会

的な議論に大きな一石を投じることになったのではないかというふうに考えています。

三つ目が、信頼される国際的なパートナーとしての学術会議という視点であります。今期もGサイエンス学術会議、毎年これは行われておりますが、今年についてはイタリアで開催されました。それからフューチャーアースの活動、A A S S Aワークショップ、アジア学術会議、それからワールドサイエンスフォーラム、これはハンガリーで興ったもので、世界に広がっている活動であります。それから仙台における国連の会議、あるいは防災に関する国際会議、こうしたものに積極的に参加したり、あるいはリードしてきたということで、国際的なプレゼンスを高めることができたのではないかというふうに思っています。

この半年間についての活動であります。ちょっとここは日付が間違っていますが、2017年4月から以降という半年間について、4月の時点でどんなことを提案したのかということで、1から5まで重要課題、あるいは取りまとめ、国際活動等々について、提案をいたしました。これについては、まだ道が半ばなので、ここでは詳しく述べません。その中で、特に今期、あるいはこの半年で重要であったことについて、幾つかの項目を述べたいと思います。その中には、少し新しい話題もあるので、お聞きいただければというふうに思います。

一つ目は、会員・連携会員の選考であります。これはこの直後の議題になっていきますので、会員の選考については、そのときに触れますので述べません。

連携会員であります。連携会員については、幹事会で決定をするということになっていきます。会員が確定しないと、連携課員が確定できないという面もありますので、本日、総会で会員が確定した後、会員の推薦者が確定した後、それを受けて、幹事会で連携会員を決めるということになっていきますので、まだ未確定ではありますが、特に連携会員においては二つの点、ここには一つしか書いてありませんが、注力しまして、一つは若手アカデミーの活動を積極的に拡大していこうということでもあります。今回は、若手アカデミーが60人規模で活動できるように、40代前半までの連携会員を大幅に増やしています。30代前半・後半、40代前半、ここに万遍なく若手アカデミーの候補者が存在するような格好で、選考を行いました。

それから、ここに書いていないことですが、女性会員比率についても、次回の改選までに、次回というのは2020年になりますが、30%を達成する。目標を30%にするということでもあります。連携会員については、改選時期の数のアンバランスというのもあって、今期の改選では29%、提案どおり進めば29%程度になると。1%足りないということで、もう1回の改選で目標をクリアするという格好になっておりますが、かなり目標まで開きがあったものを、至近距離まで到達することになったということでもあります。

それから、これは少し会員の皆様には新しい、あるいはやや悩ましいテーマであります。日本学術会議の移転問題であります。学術会議は、実は閣議決定によって、移転することになっていきます。閣議決定に関連した文書では、横浜に移転するということが1988年、

30年ほど前に決まっています。その後、移転を数次にわたって延期してまいりましたけれども、現在は来年度に移転するというので、最終的な期限を切られているということがあります。

その中で、どういう移転のあり方がいいのか、今、移転問題検討委員会という委員会を設置して、そこで詰めておりますが、学術会議の意思ではどうにもならないことの一つであります。閣議で決まって、機関として移転することが既に決定されているという枠の中で、学術会議の活動を弱めないやり方をするにはどうしたらいいか、つまり、適切な場所で適切な機能を持った施設を有するということが重要でありますので、そういう観点から詰めていって、進めてまいりたいというふうに考えています。

Gサイエンスについては、今年度行われた国際活動の代表的なものとして取り上げますが、文化遺産と災害の問題、それから高齢社会における神経変性疾患の課題、それから少しGサイエンスとしてはユニークな経済問題、新たな経済成長、科学、技術、イノベーション及びインフラの役割という三つが取り上げられて、イタリアで議論されました。これらを共同声明としてまとめて、わが国内においても、総理大臣に手交したところであります。

最後に、ICSUとISSCの合併という問題について、御報告させていただきます。

ICSUというのは、御承知のように、最も大きな学術の国際組織、国際科学会議であります。一方で、ISSCは社会科学の領域における国際組織で、日本語では国際社会科学評議会というふうに訳されています。この二つの組織が合併をするという議論がほぼ固まってきました。今年10月に台北で開催されるICSUとISSCの合同総会で決定されるという見通しです。

そうすると、次のイベントが第1回の設立総会というのを開催するということになるわけですが、その設立総会は来年度開催される予定だと、日本のフィスカルイヤーで来年度に開催される見通しです。その候補地が福岡とパリにすることが、両組織会長から伝達されました。日本学術会議として提案を準備するよという、そういうような依頼を受けたところであります。

なぜ福岡かということではありますが、実は2018年9月に、このISSCに関連するWSWF、世界社会科学フォーラムというのが福岡で開催されることが既に決まっています。これはISSCにとっては大きなイベントでありますので、関係者が出席することになっているので、ISSC側としては、この機会に設立総会が開催できればいろいろな意味で便利であるということで、ISSCの会長から学術会議に、こちらもついでにやってほしいと、こちらというのは設立総会の方もこの機会にやってほしいという依頼をしばらく前から受けています。学術会議として、それを了といたしまして、WSWFと、それから設立総会を組み合わせた格好で、福岡で開催したいという提案を持っています。

ということで、なぜ福岡かということなのですが、それとパリ。パリには両組織の本部組織があるということでパリでありまして、どうなるか予断は許しませんけれども、

学術会議としては誠実に、こういう会を開催したいということで提案をしたいというふう
に考えているところであります。

以上、少し新しいニュースも入っていたかと思いますが、私からの報告とさせていただきます。

どうも御清聴ありがとうございました。（拍手）

どうもありがとうございます。

それでは、もし今の報告について御意見、御質問がありましたら、お願いいたします。
今日は質疑応答の時間はこのタイミングだけになりますが、いかがでしょうか。

どうぞ、お願いします。

○山川充夫会員 第一部の山川です。

学術会議の移転問題のことがあるので検討委員会が設置されているということなのですが、どのぐらいの議論がされているのかというのが一つ。それから、もう一つは、やはり立地場所が重要になると思うのですね。私たちが集まる、会員あるいは連携会員、関係者が集まる立地問題というのがありますので、その面でのアクセス性をきちんと確保していただけるような議論を是非していただきたいという、この2点です。

○大西会長 ありがとうございます。

移転問題についての検討は、前期から行ってきています。このテーマ、30年たっているということですが、休み休みやってきているのですね。実は、国の機関、これは七、八十、たしか移転対象になっていまして、日本学術会議は最後の一つになっているのですね。というのは、もう一つ仲間がいたのですが、厚労省の医薬品食品衛生研究所、これが国の機関として残っていたのですが、川崎に既に今、庁舎を建てていまして、今年度中に具体的な移転になるということなのです。

ですから、そこは数年前から着手して、移転が完了しそうだということで、最後に残ってしまったということで、そういう中で非常に風当たりが強いというか、一身に風が当たっているわけでありまして、既に決まったことで、学術会議もこれに賛成しているという会長談話を、これも30年ほど前に出していまして、それを特に修正はしていないということなので、大きな流れは決まっているということです。

その中で、今、山川先生がおっしゃったように、移転する場合に学術会議のそのミッション、法律によって与えられているミッションがありますので、それを全うできなければそれは移転どころではないということになりますので、会員が集まって、議論をして、それを世の中に発信していけると、そういう施設というのが必要だということは当然であります。それが最大の関心事であります。

ただ、それは乃木坂のここでなければいけないという理屈もつけるのは難しいので、それが満たされるという条件で折衝するということになります。これから来年度に何らかの

動きをするということになると、概算要求を今からしていくということになりますので、ある程度準備はしていますけれども、概算要求の中で、どういう移転の形態で、先ほど申し上げた必要な機能を満たしていくのか、ここを最大の関心としながら進めていきたいと。

周りの、これは移転の事務的担当は国交省ですが、国交省もその機能を見捨てて移転しろということではもちろんないわけですから、諸官庁の協力も得ながら、しかし30年前の約束というのをどういう格好で果たすのか、これを両立させていきたいということであり

ます。

ほかに。
どうぞ、お二人いますので、では、後ろの方からすみません。

○兵藤友博委員 一部の兵藤です。今日の会長の報告にはないのですが、現在、実は私の関係の国際対応の分科会のメンバーが、リオデジャネイロに行かれていますので、それで、その責任者の連携会員の方のことなのですが、その方は余人にかえ難いというか。ただ、最近、ちょっと手術をしまして、近場でしたらいいのですが、リオデジャネイロというのは結構な距離と時間がありまして、本人は責任感で行きますと言って、今のところ特に事故は起きていないのですが、遠方の場合でも、フライトが通常エコノミーになってしまうのですよね。こういうことは事務局に伺えばよいことなのでしょうが、ただルールになっているからということで、多分、事務局に言ってもどうにもならない。

ですから、本人のいろいろな条件というのか、その辺をやはり配慮して、やはり人間的対応というか、そこを配慮した学術活動というのか、やはりハンデを抱えていたり、そういうのを国際的には問題をクリアしてやるというのが国際ルールになっているのではないかと思いますけれども。その点を検討していただきたいと。来期には、これは予算の問題が関わってきますけれども、是非その点をお願いしたいというふうに思います。

以上です。

○大西会長 今のは、後ほど事務局から答弁してもらいます。

もう一人。

○後藤弘子会員 一部の後藤です。

先ほどの移転問題との関係なのですが、分科会は現在、開催がここでなければ、23区の中でないと駄目だと。開催してもいいけれども、その場合は旅費が出ないというようなことになります。もし、ということで、例えば東京都であったとしても、多摩地区とか、そういうところにある大学で開催するとき旅費が出ないというのは、余りにも合理的ではないというふうに考えます。

もし移転のときに横浜市というふうになると、まさか横浜市内で開催しろということに

はならないと思うのですけれども、ここで議論しなければいけないというわけではないと、さつき会長もおっしゃいましたけれども、やはり23区内ルールというのは、次回、次期から見直していただくわけにはいかないのか、特に三多摩地区でありますとか、千葉大まで行けというのはなかなか難しいにしても、少なくとも東京都内の大学である場合には、そのような御配慮をいただきたいというふうに思っています。

そういう意味では、もし横浜市に移転するという事になれば、どこの範囲内の大学等で開催する分科会に対して、きちんとした対応をするかということも、併せて御検討いただければというふうに思います。

○大西会長 今、後藤先生の御意見・御質問は二つの内容を含んでいるかと思えます。

移転の場合に、その会議の開催場所の縛りをどうするかというのは、当然これは移転に応じて改善しなければいけない、これは当然だと思います。今、横浜という御発言ありましたけれども、先ほど、閣議決定は23区から外へ出るというのが閣議決定の内容で、そのもとにある事務的な会議で、横浜ということになっています。だから横浜を軸として考えるということになるかと思えますので、その状況に応じて考えなければいけない。

それから、現在の状態で会議等は23区内、旅費が出ないという、そういうことで、原則は学術会議で開催するという事になって、そのために会議室があるわけですが、それと同等、あるいは費用が少ない場合には、他の場所でも開催できるというふうにも緩めてあるのですね。例えば、学会が地方で開かれて、その会議のほとんどのメンバーが、その学会に別途の費用で参加できると。学会をやっているときの空き時間で、会議をやるという、そういう企画の場合には認められるということになっていますので、正に経費との関係で、少しその辺は実をとるといえるか、そういうことは進めていく必要があるのかなと思います。

○後藤弘子会員 ただやはり、例えば4時までしか駄目であるとか、土日でないといえないといった場合に、ほかの大学を使わなければいけない。ここが使えないといった状況が、かなり従来よりは広がってきているという状況も御検討いただければというふうに思います。

○大西会長 ありがとうございます。

なかなか悩ましい点もありますが、よく事情は分かります。

ほかになれば、ちょっと今の……

○花木副会長 国際担当副会長の花木でございます。

兵藤先生の先ほどの御質問ですが、実は二、三年前ぐらいまでは、遠距離の、南米の方にはビジネスを出していました。それは規則が変わったというのではなくて、予算上の制約が非常に厳しくなってきたということと、それから代表派遣で様々な学術団体へ行きた

いという希望が非常に多くなりまして、なるべく多くの方に行っていただきたいと。そのために、大変申し訳ないけど、遠距離の方もエコノミーという、その言わば予算上の折衷案でございますので、規則上、絶対駄目ということではございません。

ですからそのあたり、予算をうまくやりくりするなりして、解決できればというふうに考えております。

○事務局 それは、事務局にちゃんと事情を話して、その段階でケースバイケースで、場合によって了解されることもあるというふうに。

○花木副会長 そのあたりはどうでしょうか。いろいろな方が南米まで行きたいと、ビジネスで行きたいという御希望があったときに、どうやって、その特定の方を言わば特別扱いできるかどうかというのは、それはちょっとネゴシエーションの範囲かもしれません。何とも、お約束はできませんけれども。

○事務局 はい、今日のところは。

どうもありがとうございます。

○大西会長 本題が、会員選考ですので、これについては、このくらいでよろしいでしょうか。

ありがとうございます。また、夏季部会でも、多くの皆さんにお目にかかることとなりますので、残った質問があれば、その際をお願いいたします。

それでは、次に進みます。

[提案事項・採決]

[第24-25期会員候補者の承認]

○大西会長 次は、会員候補者の承認に関する審議であります。

まず、本提案を非公開案件として取り扱ってよいかどうかについて、お諮りいたします。

総会は公開で行っておりますが、日本学術会議会則第18条第4項ただし書きの規定により、必要があると認められる場合、会長は議決を経て非公開とすることができるとされております。提案の1と2については、人事案件であるために、非公開といたしたいと思っておりますが、よろしいでしょうか。

[異議なし]

○大西会長 特に異議なしと認めます。

それでは、提案1、2については、非公開で審議いたします。日本学術会議関係者を除いて、傍聴されていらっしゃる方、恐縮ですが御退席をお願いいたします。

〔傍聴者退室〕

〔傍聴者入場〕

○大西会長 本日が、23期の最後の総会ということになりますので、会長、副会長、大変お世話になりましたので、御挨拶をさせていただきます。井野瀬副会長から、では、お願いします。

○井野瀬副会長 皆様、こんにちは。井野瀬でございます。

先ほど突然、何か一言と言われました。

私の役割は、政府、社会、国民との接点で、皆様には提言等々、意思の発出を中心に、大変お世話になってきました。大西会長を支えながら、日本学術会議という場は一体どういう場なのだろうかということを経験させられるような出来事が、たくさんありました。そのうちに手記でも発表しようと思っておりますので、その際には皆様どうかお読みください。皆様の名前もどこかに登場するかも分かりません。

会長が冒頭に挨拶されましたように、学術会議の大きな仕事の一つであります、また、今申しましたように、私も一番大きな仕事と考えております、提言等意思の発出は、まだ道半ばでございます。まだ7月、8月、9月とたくさん出てくると思います。しっかり真摯に、心を込めて対応させていただきたいと思っております。

3年間、本当にありがとうございました。（拍手）

○大西会長 それでは、向井副会長からお願いいたします。

○向井副会長 23期の副会長を務めさせていただきました向井千秋です。

私の担当は科学者連携です。不慣れな仕事で至らない点がたくさんあったと思いますが、会長、二人の副会長、そして会員の皆様方に支えていただき、3年間務めることができたと思っています。

私は、学術会議の意義は、84万人の日本の科学者を代表し、ボトムアップの声を政府に届け、日本の学術の層の厚さを世界に発信していくことと思っております。国の学術の方向性を政策によるトップダウンとボトムアップのアプローチでまとめている国は世界的にも例を見ないと思っております。学術会議が更に発展し、日本の学術に貢献していくことを期待しております。皆様ありがとうございました。（拍手）

○花木副会長 国際担当をさせていただいておりました花木でございます。

それぞれの分野の交流は、皆さんに100%依存しておりましたけれども、全体としてのコーディネートをさせていただきました。

先ほど、会長が最後に話をされましたICSUとISSCの統合、それに伴う総会につきましては、やや会長は控え目におっしゃったのですが、実は日本学術会議として働きかけを行いまして、選挙に何とか持ち込んだというところであります。その選挙が台北で開かれるのですが、タイミングが最悪で、10月の下旬ということで、新しい会長、副会長が行けるかどうか、誰もまだ分からないので、多分自分が行かなきゃいけないのではないかとこのスケジュールには入れておりますが、いずれにせよ、皆様に引き続き御支援をいただければと思っております。

どうもありがとうございました。（拍手）

○大西会長 どうもありがとうございました。

最後ですが、私の場合、6年間お世話になりました、ありがとうございました。

学術会議というのは、6年間の体験の中で、国内はもとより、海外でもアカデミーの存在というのは非常に意味があるというのを、いろいろな場面で感じたわけであります。自分がその重責、会長という重責になるのにふさわしいかということのを常に考えさせられて、クエスチョンマークも何回もつきましたけれども、皆様の支えで、実は幾つか危ない場面というのは対外的にもあったわけでありますが、何とかもうじきゴールというテープが見えるところまで来ました。

これから、最後70件、もしかしたら出てくるものを、きちんと最後、まとめ上げるという役割が残っていますので、皆さんの御協力も引き続き得なければなりませんけれども、これから引き続き会員をお務めいただく皆さんには、更に学術会議を発展させるために御活躍いただくことをお願い申し上げて、それから、これで私と同じ卒業を迎えられる皆さんには、6年間御苦労さまでしたというふうに申し上げたいと思います。

本当にありがとうございました。（拍手）

それでは、以上で総会議事は終了いたしました。御協力ありがとうございました。

最後に、企画課長から連絡事項があります。

○企画課長 事務局からの事務的なお知らせでございます。

この後、14時半から、午後2時半から幹事会を各部予定していますので、幹事会メンバーの方々におかれましては、2階の大会議室に御参集をお願い申し上げます。

重ねてで恐縮でございますが、資料2の別紙、候補者の方々のお名前が入っている資料でございますけれども、これはこの後回収いたしますので、残しておいていただければと存じます。また、それ以外の資料で不要であるというものがあれば、残しておいていただければ、当方にて処分いたします。

以上でございます。

○大西会長 次回の総会は、第24期の1回目になります。10月2日月曜日から4日水曜日に開催予定です。第24期に引き続き会員を務められる皆様は、出席をお願いいたします。今期限りで会員の任期を終えられる皆様におかれましては、どうもありがとうございました。引き続き、日本学術会議の活動への積極的な御参画をお願い申し上げます。

それでは、これで散会いたします。どうもありがとうございました。（拍手）

[散会（午後2時30分）]